

東日本学園大学

No.1 創刊号

# 薬学部同窓会々報

発行所 歯学部歯科薬理  
発行責任者 比嘉 保

## 同窓会々報創刊によせて



### 創造と発展を目指して

理事長 渡辺 享

昭和四十九年二月、薬学部の創設が認可され、東日本学園大学の法人格が誕生しました。私が北海道に医歯薬系の大学設置を決議したのは昭和四十七年の夏でした。全くの話、無から有を生み出そうとする計画です。私と二、三の協力者が熱心に業務を推進していましたが、文部省はじめ世間の目は極めて冷たく批判的でありました。その理由は二つあります。先づ、薬学部・歯学部の開設については膨大な資金が必要で、その調達には常識的には極めて困難であること、次に当時この分野の教員、スタッフは全国的に不足しており、北海道の果てまで赴任して下さる先生はいないだろうから、教員組織の編成は不可能とする意見が一般的

でした。資金調達については佐々木真太郎先生の支援を頂いており、自信がありました。が、教員組織の編成においては全く見当もつかず、苦勞しました。全国の国公私立の歯科大学、薬科大学を歴訪し、有能な教員の就任を要請して廻りましたが、困難な問題は山積していましたが、我々の熱意のみがそれ等を次第に解決していききました。

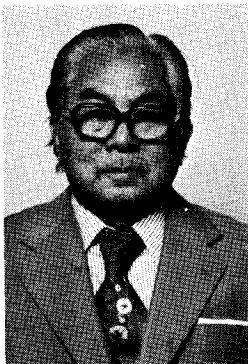
設置認可にあたり、昭和四十八年十一月、ある人が音別の教養校舎を見学に来ました。「こんな不便な場所に大学を作るのは狂気の沙汰で、入学する学生はいないだろう」と言うのです。その時私は、「赴任される先生がいるのだから、学生は必ず集まる。先生は親鳥で、学生は卵だ。親鳥がいるからには必ず卵は雛にかえる」と力説したものです。

昭和四十九年薬学部が開設されました。烏兎早々と申しますが、既に三回目の卒業生が巣立ち、同窓生は三九六名に達しました。薬学部の教職員だけでも七十六名を数えます。先般、同窓会が結成され、最初の仕事として同窓会名簿が刊行された事は、まことに同慶の至りであり、関係者のご尽力に

対し、衷心より敬意を表するものであります。

薬科学は一つの応用科学であり、特に医学、理学とは密接な学際的関係にある分野です。二十世紀の後半、科学技術の進歩は極めて急速であり、ドラマティックとさえ云えます。薬科学の分野でもその学理技術の発展は瞠目すべきものがあります。

私は、本学の同窓会活動が単なる親睦団体にとどまることなく、同窓生全員が参加して専門の知識技術の向上に役立つ様な、インテリジェンス、センターの役割を果たすものに向上することを期待しています。



### 歴史の流れの中で

学 長 安 倍 三 史

大自然のほか何一つないチノミ台原野で、ハンマーで大地に打込む杭の一本一本に、大学の悠久の歴史を願って日本酒をそそいだのはついこの間のようだ。それから

もう六年半がたった。この間に第一期生一七名、第二期生一二二名、第三期生一五七名、計二九六名の卒業生諸君が社会に巣立ち、それぞれがそれぞれの人生を切り拓いている。タゴールは、インド

のヤシの木は根をはるのに十年かかるが、十一年目から急速に成長し始めるといった。釧根原野の柏だっそうだ。黙々と五年は大地に根をまわし、吹雪に耐える自信のついた六年目から枝を伸ばすのだ。人生の木も、幼児、小学、中学、高校、大学の二十二年はじつ

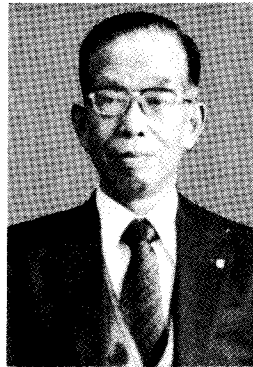
くりと大地に根をはり、二十三年目から足をふんばり腕をのばして天空を鋭く突きさすものだ。大学で学んだ四年間は、人生を八十年とするわずか五%にすぎないが、この貴重な四年間は学問はもとより、人間形成に大きく役立ったはずである。社会の中で成熟するとつくづくそのことを思い知るだろう。

卒業に目を輝かせ、胸をはって日本各地に散らばっていった懐しいあの顔の顔が思い出される。どこでも、どんなときも、くじけずがんばればとこから声援を送る。そして後輩は諸君をシンボルとして学んでいる。これから後輩絶えることなく諸君のあとにつづくだろう。

ゲーテの詩にある。

「時の歩みがためらいながら近寄り、現在は矢のように飛び去り、過去はじつと静かに立つ」と。

過去を思わず、現在に足をふまえて、未来に挑んでほしい。魅力ある人生とは明日に生きる人生だ。わが大学の歴史は諸君とともに生き、諸君とともに悠久に生きつづけていくだろう。先きの流れは後の流れを大きく小さく、左に右に導いていくものだ。卒業生諸君の御健在をはるかに、心から祈っている。



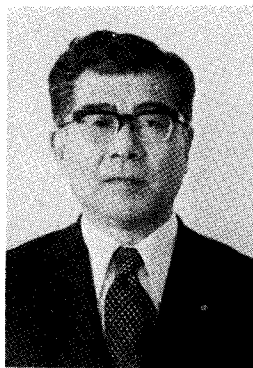
### 会員名簿の発刊によせて

薬学部 久田 末雄

同窓会の会員名簿が出来上ったことを大変嬉しく思います。この名簿の作成には、「母校に残った卒業生の方々が、一期生を中心に忙しい勤務の中、貴重な昼休みを10分、20分と割いて打合せや整理を重ね、漸く作り上げた」と聞いております。

同窓会が発足したのは、昭和54年12月だったと記憶していますが、発足後最初の事業として、会員名簿の発行を取り上げたことは、誠に賢明であったと思います。同窓会を着実に発展させるには先ず全会員を把握することが第一だからです。この名簿は、卒業した皆さんが同級生や先生の、或いは先輩の動静を知る最も手近かな資料であることはいまでもありませんが、また今のところ、卒業生と母校をつなぐ唯一の大切なパイプでもあります。

名簿作成に尽力された役員や、母校に奉職したり、大学院にあって面倒な仕事を協力された方々に、深甚の敬意を表わすとともに、会員の異動や毎年卒業する新会員の記録する第2号、第3号名簿の続刊を期待する次第です。



### チノミ台から卒業生諸君へ

教養部長 伊藤 昌明

一九七四年四月、教養部の学び

の窓が薬学と薬剤師を志す一四一名の学生に初めて開かれ、一九七八年四月には、歯学進学課程を増設するに至り、今では常時四五〇名の学生が自然環境に恵まれた通称チノミ台を学びの園としております。

チノミ台とは、アイヌ語で祭典広場と云う意味のことですが、今では学びの広場に変ぼうしたわけです。もともと、一年に一度の大学祭の際には、本来の意味を取戻すことがあります。

今春、チノミ台から専門課程へ巣立って行ったのは、薬学部の六回生、歯学部の一回生でして、それまでに薬学部生九〇七名、歯学部学生一四七名が、教養部での課程を修了し、石狩平野を目指して行ったことになりました。

創立以来七年目ともなりますと、教職員の移動も、かなりの数にのぼります。当初の教員スタッフが全員変ってしまった教室もありません。教室の現況は、

- 人文・千葉教授、江口講師
- 社会・伴野教授、久々湊助教
- 数学・貞方助教、橋本講師
- 物理・林教授、小野助教、渡辺助手
- 化学・伊藤教授、佐々木教授、高橋助教、阿部講師
- 自然科学概論・東条教授

外国語

英語・目黒助教、金子講師  
独語・コンラッド助教、橋

本講師(兼)

保健体育・武田助教、森田助  
手

石の上にも三年の諺どおりに、  
薬学部卒業生も三期を数え、同  
窓会誌第一号の発行と相運び、本  
学薬学部卒業生の社会における活  
動ぶりも基盤を得て来た感があり  
ます。

筆者は今までに三つの大学に勤  
め、各1回海外に留外または旅行  
したが、毎度思いました。日本で  
その名が知れ渡っていない新設間  
もない大学だが、海外の学者にわ  
が大学の名を知っている人がいる  
と。

同窓生諸君、各職場での活躍を  
通じて、母校の発展に協力して下  
さい。私どもも、研究、教育を通  
じて、誰でもがその名を知ってい  
る東日本学園大学に成長、発展す  
るよう努めたいと思います。

## 全国の会員諸氏皆様へ

同窓会会長 玉木 正純

一九八一年を迎え、またひとつ  
新たな夢、希望を胸に抱き、仕  
事に勉学に勤しんでおられること  
と存じます。

ついで、昨年暮れの11月22日(土)に、

第二回総会を札幌にて開催し、今  
までに我々本部役員等が、活動し  
てきた事、会計報告、および今後  
の活動、同窓会のあり方等々、数  
時間にわたり討論を致しました。

漸く我々会員の念願としていま  
した同窓会会員名簿を発行する運  
びとなりました。これには、学内  
に在籍する者たちの並々ならぬ御  
協力を得たことを心から感謝する  
次第であります。

また、ここに第一号の会報を発  
行することと相なり、徐々には  
ありますが一歩一歩前進している  
様を見、我ながらうれしく思いま  
す。しかしながら、同窓会の基礎  
は、まだまだ出来ておりませんの  
で、これからも会員諸氏、又諸先  
生方等の色々な意見を参考とし、  
長い目で着実に基礎を固めようと  
思っている次第であります。

在学中、卒業時においては、『  
同窓会』というものの認識は極め  
て薄いものであり、学窓を離れ、  
五年、十年という歳月が経って行  
くに従い学生時代を懐古し、『同  
窓会』というものの存在を改めて  
認識するものではないだろうか。  
そのためにも、ここ何年かの内に  
しっかりとした基盤を造り上げな  
くてはいけません。

我々、東日本の学生は、他大学  
とは異を呈し全国各地に点在して

おり、一人一人の現状を掌握、  
把握することが極めて困難を要し  
時間、労力、費用がかかります。  
そこで会員諸氏には、甚だ恐縮で  
はありますが、少しでも我々の  
同窓会”に対して御支援、御協力  
を載せたく今回の執筆と相成りま  
した。

第二のステップとして今後は、  
各地区での支部活動を要請し、縦  
の協力と共に横の協力を充実させ  
て行くようではありませんか。

## 第二回総会について

昭和55年11月22日に第2回総会  
が開催され、次のことが討議され  
ました。ここに、総会での討議内  
容を報告いたします。

- 1、総会開催の日時について
- 2、支部活動について
- 3、名簿の配布について
- 4、会計報告
- 5、その他

1、総会開催の日時については、  
6月と10月の2つの意見がでた。  
6月賛成の意見としては、前年度  
の会計報告、本年度の予算の承認  
などがあるので早い時期が適当で  
はないか。また、10月賛成は、新  
会員は6月では出席は不可能だろ  
うから10月ごろが良いのではない

か、という意見であった。総会で  
は意見の調整がつかず、理事会で  
話し合われることになった。

理事会での決定の日時について  
は、おつて、総会開催案内いたし  
ます。

2、支部活動について

関東と沖縄地区で支部設立の動  
きがあるようなので、とりあえず  
この2つの地区で支部を作る。そ  
の設立準備代表は、西野氏、嘉陽  
氏に願う。

他の地区は、代表となる人を理  
事会で推薦し、その人を中心に活  
動してもらってはどうか、という  
意見がでた。

3、名簿の配布について

●改訂は4年に1回  
●改訂後の新入正会員(新卒者)  
には一番新しい改訂版を全員  
に配布する。

●改訂後の新入正会員の氏名、  
住所、会員の氏名、住所、勤  
務先等の変更は、6月ごろ発  
行の会報に掲載する。

●一回目の名簿は正会員全員に  
配布、二回目以降については  
正会員に有料配布、また、  
会費納入済みの会員にだけ無  
料配布などの意見がでたが、  
これからの予算を検討してか  
ら決めることになった。

4、会計報告

5、その他  
別表の通り承認されました。  
会計監査員として

2期生 宮城ひろみ  
3期生 石原 敦  
の2名が選出された。

任期は次回総会までである。  
今年度の総会は、出席者が去年より大幅に下まわり少数の出席者

数であった。我が同窓会の基盤を作っていくためにも、また総会は会員の親睦等を図る良い機会と考ええており、次回からの総会にはより多数の出席を期待したいものである。



**※同窓会にすばらしい名称をつけて下さい。**

本同窓会は東日本学園大学同窓会でしたが、薬学部と歯学部に分けることになり東日本学園大学薬学部同窓会となりました。

よって私達の同窓会の名称に最適な名前を会員である皆様と考えていただくことになりました。

「これは／＼」と思うものがありました。したら左記まで御連絡願います。

尚、メ切は五月末日迄です。  
連絡先

〒061-02

北海道石狩郡当別町字金沢

1757

東日本学園大学歯学部

歯科薬理 藤本 典子迄

電話番号

〇一三三二一三二一三二二二一